

第1章 ゲスな貴族に口説かれた

エルフ嫁さん、

怒りの剣を抜き放つ

エルフ王国側との水面下での終戦工作のため、エミリアの実家へと赴いてからというもの。

やはり、その場に身を置くと、いろいろなこと

が分かってくる。
国内での終戦派と継戦派の力関係とか、終戦交渉に対する温度差とか。

終戦派の有力者であるエミリアの父上もいろいろ奔走してはいるようだが、なかなか遅々として進まない議論の中身だとか。

抱えている事情は双方の国で、そんなに変わらないようだ。

俺の国にしたって、かなり戦況が有利なこの状況で、講和なんて言い出したら、特に軍部の戦争好きな連中が黙ってないしな。

だからこそ、財務卿の兄を持つ貴族の家の出とはいえ、一介の商人に過ぎない俺に、水面下で話をまとめる仕事をさせておいて、表の政権幹部

たちは今頃知らぬ顔を決め込んでいなければならなかったりするわけだ。

ほんつとーに、政治ってモンは面倒臭い。

そんな状況だから、こっちとしてもあんまり悠長に時間をかけているゆとりはない。

早く話をまとめてしまわないと、俺が動いていることがどこからか漏れて、話が壊れてしまいかねない。

というわけで、ちょっと乱暴だが、エルフ王国側の継戦派の重鎮の一人である、アルセーヌ卿を陥れる策を思いついた。

その機を待ちながら、元々エミリアが暮らしていた部屋で、ゆつくりと二人だけの甘い時間をたっぷりと過ごして。

そんな風に過ごすこと数日。
ついに時は来た。

2

情報を収集するために一度アルセーヌ家のお膝元の街に潜入してから1週間。

再びやって来た週末が、作戦の決行日だ。

この日、アルセーヌ家の城で、舞踏会が開催される。

そこに、俺とエミリアで潜り込むのだ。

とは言っても。

裏からこっそり忍び込むというわけではない。

正面から堂々と……だ。

エミリアは目元や口元など、メイクで少し印象を変えて。

そして、俺は……エルフのお姫様お付きの神官の装いだ。

3

前の週に偵察に潜入した後、1週間あったわけだが、その間にエミリアは俺用の付け耳を準備していた。

「うん、これで、どこから見ても怪しまれなくて済むわね」

この日の出発前夜、作らせた付け耳の出来に満足そうに彼女は頷く。

「まさかここまでやるとは……」

この前、偵察の時は身体中緑色に塗りたくられ

て、オーク族に化けさせられた訳だが、その時といい、今回といい、エミリアはやるようになったら徹底的だ。

「潜入するんですから、これぐらいはしなきゃ」

どこか楽しそうにエミリアは言う。

エミリアのヤツ、俺をおもちゃにして遊んでるよな、絶対。

「それにしても、よくこれだけ精巧なものを……」

「まあ、1週間ありましたから。ギリギリでしたけどね」

「よく1週間で作らせたもんだ」

実際、触ってみた感触は本当に皮膚に触ってるみたいな感じだし、装着してみると、時折ぴくぴくって、動くんだ、これが。

なんというか、気持ち悪いくらい本物っぽい。

こんなモン、どうやって作ったんだか、エミリアに聞いてみると。

「知り合いの職人さんに作ってもらったんだけど、どうなっているかは企業秘密だって、私にも

教えてくれないんです」

……ということだそうだ。

謎すぎる。

そんなわけで、忍び込むというよりは、堂々と舞踏会に参加することになった俺達。

エミリアの実家、シュトレーヌ家の関係者という身分で申し込むと、あっさりとは正規の参加者として通されてしまった……というのが実のところだ。

こういうところは、やっぱり貴族の信用力というのは絶大だというのを実感する。

さすがにシュトレーヌ卿とアルセーヌ卿の間に表立って対立構造が明るみに出てくれば、警戒もされるといものだろうが、今の段階では、二人の関係はまだ意見対立の段階に過ぎない。

だから、まだ、シュトレーヌ家の信用力は通用する。

使えるものは使わない手はないからな。

さて、会場の中を見回してみろ。

先週、噂には聞いていたが……。

こりゃあ、雰囲気悪いわ。

主催者側のひな壇の席にいる女性たちの雰囲気がある……ギスギスしすぎだ。

見た目にも分かるくらいに、お互い目を合わせようとしていない。

それでいて、お互いに張り合うようにそれぞれ着飾っているから……あそこだけなんか見た目にも異様で。

前に刃物沙汰になったとは聞いたが、あの陰悪さを見ると、有り得ない話ではなさそうだ。

さあ、今夜はどんな集まりになることやら……。
……楽しみだ。

「あなた。目が爛々としてますよ……」

エミリアが少し呆れたように呟く。

「今にも騒ぎが起こればいい、そんな顔してますよね……」

「まあ、そう言うな。今日に関してはその為に来ているんだしな。こっちの手を汚さずに騒ぎが起これば、こんな楽なことはない」

「それはそうですが……」

「そういう意味では、あそこあの雰囲気は楽しみではあるな。あ、いつでもそういう揉め事が大好きとか、そういうんじゃないからな」

「それは分かれますけども……あなた、ちょっとぶっちゃけすぎです」

「そう言うな」

さて、エミリアと二人、会場の端に陣取って、

軽く飲み物を嗜みつつ、その後の様子を覗う。

来場客は、思い思いに当主の正室、側室のご機嫌を伺う者あり、若い女の参加者は、またそれぞれに着飾って、あわよくば当主の目に留まろうと、彼のお出ましの時を今か今かと待ちわびている様子。

この前に酒場で耳にした噂からすれば、この家の女たちの事情を知らない、それらの若い女たちがアルセーヌ卿の元に群がれば、きつと、一気に場の空気は凍り付くことになるな。

4

果たして、会が始まってまもなく。

アルセーヌ卿が姿を現すと、事情を知らない若い女たちが、我先にとアルセーヌ卿の元へ群がっていく。

それを見つめる彼の正室・側室たちの集団からの凍り付くような視線。

あの席にいる妻たちは、言ってみれば、アルセーヌ卿にとってはもはや用済みの女たち。

おまけに、下手に妻としての立場が与えられて

いるが故に、それが足枷となって、あの若い女たちと同じように夫に群がっていくような真似もしづらい。

あの家の奥方は、人目も憚らず夫にベタベタと侍るようなはしたない女なのか……などと、人の噂に上るようなことがあれば、家の名前を傷つけてしまう。

そのようなことは、彼女たちにはできない。せめて、夫の目に留まれば……と、一縷の望みをかけて着飾った彼女たち。

だが、そちらにアルセーヌ卿が目を向けることはないようだ。

チラリと一瞥することすらない。

「かわいそうにな……。今、あいつのところに群がっている女たちにしたって、目に留まったところで、すぐにあのひな壇行きの運命だ」

「そうですね……。ですが、あの様子ですと、そろそろ頃合いでしょうか」

「そうだな。そろそろ始め……ん？」

突然、ひな壇の方から人影が飛び出した。

「きゃあー……っ！」

女たちの悲鳴が上がり、蜘蛛の子を散らすよう

に散り散りに逃げ惑う。

その後ろで、夫に群がった若い女たちを追ひ払うように小刀らしき刃物を振り回す、側室の一人と思われる女の姿があった。

「いきなりおっ始まったか……」

「あなた。どうしますか？」

「そうだな。もう少し様子を見るか。しかし、アルセーヌ卿の反応を見たか？ あれだけのことが起こっているのに、全く関心を示そうとすらしない……」

「はい……」

アルセーヌ卿は目の前で刃傷沙汰が起こっているというのに、全く表情を変えない。

ただただ、面倒臭そうに、その様子を眺めているだけだ。

「ここまでやっても、怒りの感情すら向けられないとはな……。無関心の極みというべきか」
「いくらなんでもこれは酷すぎます……！」

こちらとしては、騒ぎを起こしに來たとは言え、俺ですらさすがに見ていたたまれなくなる光景だ。

しかし。

ひとしきり若い女たちを追ひ払った彼女は、アルセーヌ卿に向き直る。

その表情は、怒りに引きつっている。
その刃の向く先は……。

「むっ！ ヤバイ！」

考えるよりも先に身体が反応する。

アルセーヌ卿を陥れる事が目的ではあるが、ここで死なれても困るのだ。
だが。

次の瞬間。

ザシュッ！

アルセーヌ卿は躊躇うことなく腰の刀を抜き、一刀のもとに彼女を斬り捨てたのだった。

「……ふん」

「殿！」

慌てて駆けつける従者たち。

突然のことに、狼狽している様子がありありと見える。

そんな彼らに対しても、目を向けることもせず。
「片付けておけ！」

吐き捨てるようにそれだけ言い付けて、彼は何事もなかったかのように、会場の真ん中へ歩を進

めていく。

そして、俺達二人と目が合った。

エミリアの姿を見て、目を見開くと同時に、表情を和らげる。

「これはこれは……なんとお美しい。そなた、名は何と申される？」

先程の刃傷沙汰なんか無かったみたいに、エミリアに話しかけてきた。

「今宵は是非、そなたと二人きりでゆっくり過ごしたいが……よろしいかな？」

このタイミングで、そんなことを言えるのか、こいつは……。

エミリアの表情にも、サツと陰が差した。

「この状況で、そのような気分にはなれません」

「そんなこと言わずに、ほら、こっち来なさい。一緒に素敵な夜を過ごそう」

彼は、強引にエミリアの腕を掴んで自分の側に引っ張ろうとする。

その瞬間。

「バカなこと言わないで！」

エミリアの怒声と共に、アルセーヌ卿の身体は宙に浮き。

そのまま仰向けに床に叩き付けられた。

当然、公衆の面前で無様な姿を晒す羽目になったアルセーヌ卿は激怒する。

「この小娘っ！ 私にそのような狼藉を働いて、無事に済むとは……」

だが、その言葉はその先を継げなかった。ザシュッ！

エミリアが腰の剣を電光石火の速さで、仰向けになった彼の太股をかすめて床に突き刺したのだった。

「失せなさい！ さもなければ、この次は、あなたに突き刺します」

そう告げたエミリアの目が据わっている。

こんなに怒ったエミリアの姿は初めてだ。

表情はほとんど無表情だが、余計に怒りの深さを感じる。

そして。

アルセーヌ卿は、失禁していた。

「そ…その顔、忘れんぞ！ 覚えておけ！」

捨て台詞を残して、彼はその場を逃げ出した。緊迫する状況に、静寂に包まれる会場内は、やあって、緊張が解けたのか、ざわめきが戻って

くる。

エミリアも静かに剣を収めて。

「あなた……申し訳ありません。勝手なことをして、計画を台無しにしてしまいました……」

「いや……構わんよ。おまえがやらなきゃ、俺がやっていたかもしれんしな。もしかしたら、いきなり首を刎ねていたかもな。俺の大事な女を、あんなクズ野郎に手を出されたとあってはな」

「でも、計画は……」

「今日の集まりはヤツの身内ばかりで固めたものでもない。案外、ああいう特大のネタが飛び出したことだし、案外勞せずして噂が広がるかもしれないな。むしろ、仕事が楽になったかもしれない」

「では……」

「だが、念には念を入れておく。口が軽そうな使用人や招待客を見つけて、片っ端から力ネを握らせて酒場や街中で、この話をばらまいてもらおうのさ。この際、あの外道、徹底的にツブしてやる」

「はい！」

すぐに、俺はエミリアと会場の中を見回して、聞き耳を立てる。

ま、やることは難しいことじゃない。

さっきの出来事をいろいろ会話している人間を探して、話をしてみて、顔を覚え、相手にもこっちの顔を覚えてもらう。

そして、後で酒場へ行つて、そこで見た顔を探し、話しかけるのだ。

出入りの業者関係の人間などが狙い目だ。

多分、この仕事が終われば、こんなネタがある日は速攻で街の酒場に繰り出して、噂話に興じるヤツはたくさん居るだろう……。

5

しかしながら。

そこまで手の込んだことをする必要はなく。

今のエミリアとアルセーヌ卿の騒ぎで、舞踏会は自然解散みたいな形になり、暇そうにしていた出入り業者関係らしき連中に声をかけたら、速攻捕まって握手攻めになつて。

話が盛り上がっていくうちに、気が付いたら、なんか仕事宇宙に浮いてみんな暇になつたのか、出入り業者関係者がこぞつて集まつてきて、そこに他の出席者も集まりだして。

仕事も舞踏会も立ち消えになってしまったし、この際みんなで街に繰り出して飲み直そうということに、その場の雰囲気でなんとなく決まり、みんなに連れ出される形で街の大きな酒場へと向かうことになる、願ってもない展開に。

酒場で酒が入ると、みんな気が大きくなったのか、もうその場の総出でエミリアのことをヒーロー（というよりは、ヒロインか）扱いで、ほっといても持ち上げては辺りに居る誰彼構わず舞踏会でのことをマシガンのごとく話しまくって拡散しまくってくれて。

おかげで、その夜は一晚中、酒場中がすっきりその話で持ちきり状態になってしまった。

俺もなんだかんだでしこたま酒奢られて、夜半頃にはもう任務も計画もどこへやらというか、もうべろんべろんになっていて、ワケ分かんなくなつてたと言った方が正確だろう。

そして、日が昇った頃に酒場が閉まり、散会となり、解放された俺達二人。

「う……頭痛え……」

「大丈夫ですか？」

さすがに飲み過ぎて、二日酔いが酷い。

エミリアもけっこう酒奢られてたと思うが、案外けろっとしているな……。

「エミリアは酒豪なんだな……」

「どうしてですか？」

「おまえだって、一晚中酒勧められてたんじゃなかったのか？ よく潰れなかったな」

「それはそうよ。私は馬鹿正直に勧められたのを全部受けたりしてないもの。あんなの全部飲んだら、潰れるのは当たり前じゃないですか……」

「いや、せっかく盛り上がってくれてるのに、水差したくなかったんだよ……」

「まあ、あなたがそうやってくれたおかげで、私は適度に断れたところもありますから。とりあえず、今日は近くに宿を取って、一日ゆっくり休みましょう。うちの屋敷に戻るだけでもそれなりに距離ありますし」

「ああ、そうだな。そうしてもらえると助かる」
こうして、エミリアに何とか支えてもらって、近くの宿に部屋を借りて、倒れ込むようにベッドに撃沈した……。